

Ruhe (ルーエ やすらぎ)

November 2009

22

The German House in Naruto

発行日 2009年11月30日
発行 鳴門市ドイツ館
編集 川上三郎
〒779-0225
鳴門市大麻町桧字東山田55-2
TEL:088 689 0099 FAX:088 689 0909
URL: <http://www.city.naruto.lg.jp/germanhouse/>
e-mail: doitukan@city.naruto.lg.jp

シャーマンさん ドイツ館を中心に制作活動

ハンブルク在住の芸術家(写真、絵画、彫刻)、ヴェルナー・シャーマンさんが6月、板東に来られました。こちらで約1ヵ月間滞在し、当時のドイツ兵捕虜のゆかりの土地を訪問したり、幼稚園、小学校、高校、老人会の集まりなどで地域の人たちと交流しつつ写真撮影を行い、それを順次発展する展示形式で往事の写真と見比べる写真展「故郷となったバンドー」をドイツ館で開催しました。

私たちがいろいろとお世話させていただきましたが、とくに前国際交流員のパトリック・ワグナーは受け入れの準備段階から滞在中まで、各方面との交渉に骨を折ってくれ、また地元の高校や小学校、幼稚園から老人会の集まりなどへの案内と通訳をしてくださいました。川上は捕虜達の遠足先への案内をしました。当時吉野川にかかっていた古川橋の跡地へ案内したときには、シャーマンさんがかつての橋脚跡とみられる木杭がいくつかあるのを発見し、私もこれまで気づかなかったことで、びっくりでした。これが本当にかつての橋脚かどうかの確認はまだしていませんが、当時の地図に表示された位置にぴったり符合すること、杭が川岸から少し離れた水面にも顔をのぞかせていることから、ほぼ間違いないのではないかと思います。また捕虜達が薪の伐採に汗した山近くの池に案内したときには、静かな水面と池の周囲の緑あふれる森にドイツの詩人ヘルダーリンの詩を想起させると感動しておりました。写真は、ドイツ兵たちがよく海水浴に出かけた櫛木海岸で撮影

しているシャーマンさんとドイツ館での写真展の様子です。ちょうど漁港の岸壁では漁師さんが網のつくりをしているのを見つけると、身振り手振りで話しかけ(？)、撮影させてもらっていました。積極的で気取らない人となりを感じた場面でした。



旧板東俘虜収容所の近況

南の池にはガマや灌木などが生い茂り、ほとんど水面らしきものが見えませんでした。夏にその除去が行われました。最近池に水が張られて、かつての姿に近づきました。また池の周辺にはセンダンなどの樹木があまりにも繁茂しすぎているのが、伐採・剪定されて、すっきりしました。

元収容所の北端、北の池と高速道路にはさまれた区画に「菩提樹の森」が完成しました。公式の供用開始は来年の4月からとのことです。これはこの周辺で進められている、ドイツ村公園整備の一部となるもので、北の池の改修も同時に行われました。この森にはノルトライン・ヴェストファーレン州独日文化交流育英会から寄贈いただいたセイヨウボダイジュと池の近くにしだれ桜が植えられました。まだ植え付けたばかりで、樹が成長して葉が生い茂ったときの姿は想像できないのですが、面積の割に本数が多いという印象です。一方、この付近は猿がよく出没し、樹木に登って枝を激しく揺らしては、よくへし折っていますので、これらの樹が痛めつけられないか心配でもあります。

退任あいさつ

前鳴門市国際交流員
パトリック・ワーグナー

『世界のどこに。。。』

。。。ドイツ館のような素晴らしい記念館があるのでしょうか。

元捕虜のことは現代に合わせて、離任の挨拶をさせていただきたいと思います。2009年8月6日をもって、鳴門市での国際交流員としての仕事が任期満了となりました。丸三年という月日は、陳腐な句ではございますが、思えば「あっという間に」過ぎてしまいました。偶然ではありますが、ドイツ兵捕虜が板東にいた期間とほぼ同じ期間でした。この共通点からだけでなく、業務内容はもちろん、「板東俘虜収容所」が毎日の身近な存在であったため、この場で元捕虜が言ったもう一つのことばを借りたいと思います。『板東は私の大学でした』という発言です。捕虜達が収容所時代に充実した毎日を送り、互いに、そして近所の方々との交流でも多くのことを



学び、とにかく勉強をしっかりとできた人がいたように、私もドイツ館での勤務を通じて、貴重な経験を積んだことで、色々と勉強になりました。そういう意味で、『ドイツ館は私の大学でした』と言っても過言ではないでしょう。業務内容がことに幅広く、それを他人に説明した時には、いつもこの二例を挙げていました。出張で渡独して、市長や県知事、また州首相の通訳をしたり、ドイツ館や地元の保育園でのサンタさんになった経験もあります。その他に、案内、翻訳、講演会、連絡調整やリサーチなど様々な仕事がありました。これほど内容の多様な職場は殆どないと思います。難しい通訳やサンタさんの演技とではどちらにも魅力とチャレンジの気持ちを感じたのですが、両方とも問題なく楽しくやり遂げることができたのは、間に支えとなったドイツ館があったからに違いない

です。ご協力いただいた方々が数え切れないほど多くいらっしゃいますが、仕事の軸となったのは、まさにこのドイツ館と私が所属していた鳴門市役所の文化交流推進課です。優しい同僚達と一緒にまったく苦のない、なおかつ有意義な毎日をご過ごさせていただきました。それが真の幸せだと思っております。

個人的にも地元の方々と仲よく暮らし、手料理や地酒などをご馳走して頂き、掛け替えのない日々ばかりでした。

捕虜達が板東を絶賛したことが改めてよく分かるようになりました。板東には「お接待」という、よその人を快くおもてなしする昔からの伝統がいまだに生き生きと存続しています。おかげで、私は充実した三年という歳月を過ごすことができました。徳島から離れても、皆さんとまた再会できる日を楽しみにしております。

最後に、引き続き、後任者のアンヤさんを私と同様に優しく受け入れてあげてくださいますようお願いいたします。

私の人生にとって、鳴門での三年間は忘れられない大きな存在になりました。皆様方には大変お世話になり、本当にありがとうございました。今後とも何卒よろしく願い申し上げます。

心より感謝を込めて

Patrick Wagner



着任あいさつ

鳴門市国際交流員
アンヤ・ハンケル

はじめまして

私はアンヤ・ハンケルと申します。ベルリン出身の29歳です。8月から鳴門市ドイツ館で国際交流員として仕事をしています。今までのドイツ人国際交流員は皆、男性でしたので、女性でドイツ館に赴任したのは私が初めてです。主人(カルステン・31歳)と子供二人(ヤコブ・4歳、



クララ・1歳)と一緒に来日しました。家族と共に日本で生活をしながら、毎日の仕事をこなすことは、私にとって挑戦です。

家族と一緒に日本で生活を始めることは一人より大変だと思いましたが、今のところ、周囲の皆様の支えのおかげですべてうまく進んでいます。こんなに温かくてご親切なおもてなしは想像していませんでした。皆様にはとても感謝しています。

私は主人と同様、ベルリン・フンボルト大学で日本学を専攻し、途中、2003年から2004年までの一年間、東海大学に留学しました。専門は日本の年中行事だったので、その関係でお盆と阿波踊りについてのレポートを書いたことがあります。また、2006年に徳島県か

らの訪問団がドイツを訪問し、ベルリン日独センターで阿波踊りを披露した際には、阿波踊りの印象を肌で感じるために見に行きました。そのとき通訳として同行しているドイツ人がいて、とても上手に通訳をする方だと思いました。まさか、そのドイツ人が鳴門市ドイツ館の国際交流員マティアス・ヒルシュフェルドさんで、のちに私の先輩となるとは、当時の私にはもちろん知る由もありませんでした。

私は今も阿波踊りに興味があり、また、これからの仕事に対して意欲と好奇心がたくさんあります。この職場では、翻訳をはじめ、使節団訪問の企画運営、ドイツ語の授業、異文化交流活動まで様々な仕事があり、これらの任務がとても楽しみです。

また、家族と一緒に地域の一員として生活することは、私たち個人にとっても日独交流を深めるチャンスだと思います。

現在、私はドイツ館の館内案内のために、板東俘虜収容所の歴史について一生懸命勉強しています。収容所の捕虜たちと日本人との交流によって生まれた友情が、幅広い分野に広がり、今でも互いの文化に興味を持ち続けていることは素晴らしいと思います。姉妹都市盟約が締結され、その友情が文書の中だけでなく、実際にも生き生きと、末永く育まれています。私は日を追うごとに、この職場が日本中の国際交流員（CIR）にとっても他にはない本当に魅力的なところだと感じています。これからこの仕事を一生懸命頑張りたいと思います。

最後に、私の赴任にあたって様々な面で支援して下さった前任者のワグナー・パトリックさんにこの場をお借りしてお礼申し上げます。

どうぞよろしくお願いいたします。

所蔵品紹介 『俘虜写真帖』

サイズ：370mm×253mm

200ページ（序文、目次をのぞく）

ドイツ館には、元捕虜やそのご家族から寄贈いただいた写真やアルバムがいろいろ所蔵されています。それらは当時の収容所の様子や捕虜の生活・活動などを知る上で貴重な画像史料となっています。そのなかに俘虜情報局が発行した『俘虜写真帖』というものがあります。俘虜情報局というのは戦争時に特別に設置される機関で、各収容所に対して捕虜に関するさまざまな指示をしたり、情報のとりまとめをして、国内外の問い合わせに対応していたところです。これはその俘虜情報局元職員の方から寄贈いただいたものです。館内でアクリルパネルの中にはめ込んで展示してありますので、私た



ちもふだん直接内容を見ることはできません。ここで、そのほんの一部をご紹介しますことにします。

通常の和書と同じ右開きですが、使用言語は日本語とフランス語で、最初の「序」と最後の奥付以外はすべて横書きとなっています。フランス語も使われているのは、この写真帖が諸外国に日本側の捕虜の取り扱いがいかにか公平であり、人道に配慮したものであるかを宣伝するためであったからで、そのことは「序」に明瞭に書き記されています。

日本語の「序」の日付は大正六年八月ですが、そのフランス語訳の方では1917年2月となっていて、年は同じですが、月に違いが見られます。さらに奥付では大正七年三月刊行となっています。写真を撮影したり収集するのに日数がかかり、また収容所の移転などがその間に行われていて、刊行が遅れたのでしょうか。掲載の収容所は、習志野、静岡、名古屋、大阪、似島、青野原、徳島、丸亀、松山、板東、大分、福岡、久留米の13カ所で、1915（大正4）年に閉鎖された東京、姫路、熊本は含まれていません。

内容は、収容所によって少し違いはあるのですが、だいたい収容所全景、集合写真、将校および一般兵士の居室、炊事と食事の様子、郵便物の授受、診療所、収容所内の売店、体操や運動、娯楽といったテーマが選ばれています。そして写真に対して、短いキャプションが日仏語並記で記されています。

徳島県会議事堂の模型

サイズ：台座の横幅 1330mm、奥行き1090mm（前面中央の玄関部分の張り出し（幅446mm、奥行き 228mm）を除く）、高さ 716mm、縮尺約1/20

この模型は今年3月に徳島県立徳島工業高等学校（現在は他の2校とともに統合されて徳島県立徳島科学技術高等学校）から寄贈いただいたものです。徳島県会議事堂は1914（大正3）年12月から1917（大正6）年4月、他の2収容所とともに板東に統合されるまでの約2年半、徳島俘虜収容所が置かれていた所です。この模型の製作年代ははっきりしませんが、大正年間と思われる。この高校の前身である徳島県立工業学校の建築科の生徒たちの習作として製作されたと聞いていますが、かなり精巧な作りです。玄関など破損・欠損個所があちこち見受けられるものの、建物全体の様子はよく分かります。ついでながら、玄関の屋根が手前に見えますが、これは誤って他の模型（おそらく寺社）の玄関屋根が紛れ込んだもので、本来のものではありません。

『徳島俘虜収容所報告』中の概略図や当時の写真とこれを見比べると、とても興味深いものがあります。たとえば、一階は四周が玄関



と一部の壁面をのぞきガラス戸になっていたことが、模型と写真との照合から見て取れますし、概略図で68坪と記されている所は柱が一本もない大広間であることが分かりました。また、概略図には廊下でつながった付属屋がいくつか記載されていますが、模型は母屋のみです。なお、この学校には当時の『工場日誌』が残されていて、そこにはドイツ兵捕虜が勤務していたことが記録されています。しかしその仕事の内容から見て、彼らはこの模型製作とは無関係でしょう。

特別企画展「板東のドイツ兵捕虜制作印刷史料」

（5月11日～6月14日）

これまで、ドイツ館にはドイツ兵捕虜制作の様々な種類の印刷史料があります。これらはすでにご報告しているように一括して徳島県指定文化財（歴史資料）となっています。常設展では、これらの史料のごく一部しか展示できないため、一般の方々にはなかなか直接目にする機会がないので、企画した展示会でした。また、これに合わせて特別講演会を行い、川上がドイツ館所蔵のさまざまな印刷史料についての解説を行いました。特に多色刷りのプログラム類は、間近に現物を見ることによって、その非常に繊細で多彩な謄写版技法を実感してもらえと思ったのですが、さほど多くの観覧者が来なかったのが残念でした。

鳴門市ドイツ館の『どこにしようと、そこがドイツだ』ドイツ語版の発刊

鳴門市ドイツ館では、板東俘虜収容所と第二次世界大戦後の地元とドイツとの交流、およびドイツ館について紹介するため、ガイドブックとして田村一郎編著『どこにしようと、そこがドイツだ』という本を発行しています。これは幸い好評で2回の改訂を経て第3

版を出すまでになっています。ドイツ館を訪れるドイツ人の方からは、この本のドイツ語版はないのかという質問がときどき寄せられていました。そこで前国際交流員のパトリック・ワーグナーさんがその翻訳を買って出てくれました。彼が離任する前に翻訳は終了したのですが、全国的な地方自治体の財政危機の状況は鳴門市でも同じで、これを通常の書籍の形で出版することはかないませんでした。そこで緊急避難的にこれをパソコンで読める電子本として発刊することにしました。形態はほとんどのパソコンで読むことのできるCD-ROMで、通常の音楽CDと同じ包装にしています。ドイツ館で700円で販売しています。国内外発送についてはドイツ館までお問い合わせください。



『「青島戦ドイツ兵俘虜収容所」研究』 第7号

「青島戦ドイツ兵俘虜収容所」研究会から研究誌第7号が12月初旬に発刊されます。購入についてはドイツ館までお問い合わせください。なお、第8号の原稿募集要領については同誌に記載されています。

11月までの主な行事と特別企画展

- 4月1日(水)～15日(水) グリム童話 イースター紹介展
- 4月12日(日) 第4回イースターまつり
- 4月18日(土)～5月7日(木) ドイツワインを旅するパネル展
- 5月11日(月)～6月14日(日) ドイツ兵捕虜制作の印刷史料展
- 5月17日(日) 特別記念講演(川上)
- 6月16日(火)～7月6日(月) 『故郷となったバンドー』写真展
- 7月4日(土) 七夕コンサート
- 7月16日(木)～7月31日(金) リューネブルク市からの記念品展
- 7月19日(日) NIKO室内楽コンサートVol.1
- 7月26日(日) 別府葉子シャンソンコンサート

- 8月23日(日) ピースコンサート
- 8月30日(日) 「故郷と異郷」コンサート
- 9月12日(土) 「What's Jazz～ジャズってなあに?～」ジャズレクチャーコンサート
- 9月16日(水) ノルトライン・ヴェストファーレン州文化育英会招待学生来館
- 9月23日(水) 大阪神戸総領事館の総領事夫妻と副総領事来館
- 10月6日(火) ハノーヴァー独日協会一行来館
- 10月14日(水) ニーダーザクセン州柔道連盟一行来館
- 10月16日(金)～11月4日(水) 「モダン青島展」
- 10月25日(日) 第16回ドイチェス・フェストinなると
- 11月6日(金)～25日(水) 市教委「阿波の入口古代王権のみち」展
- 11月8日(日) 「古代王権のみち」シンポジウム

これからの特別企画展の予定

- 12月1日(火)～14日(月) 「ベルリンの壁崩壊並びにドイツ再統一20周年記念巡回展」ドイツ総領事館
- 12月13日(日) 田中貴志コンサート
- 12月16日(水)～1月24日(日) 奥山実秋氏絵画展
- 1月10日(日) 近藤信貴ピアノコンサート
- 1月31日(日)～2月13日(土) フレスコ画展
- 2月21日(日) 平和村イベント
- 3月10日(水)～22日(月) FRIEDENSFEST絵画展

行事・特別企画展につきましては、変更する場合がありますので、当館ホームページなどでご確認ください。

👁️ 編集後記

今年、国際交流員として3年のあいだ鳴門市ドイツ館だけでなく、鳴門市の行事や国際交流などの場で活躍してきたパトリック・ワーグナーさんが退任、代わってアンヤ・ハンケルさんが着任しました。国際交流員としては、鳴門市では初めての女性です。ご家族もいっしょで、子育てをしながらの勤務となります。大変だとは思いますが、活躍をおおいに期待しています。今回も、発行が予定より2ヵ月も遅れてしまいました。10月に入ってからの行事や元捕虜の曾孫夫妻などの訪問、そのほかいろいろ報告したいことがあるのですが、それは次回とします。(川上)